

— 書 評 —

アビ鳥を知っていますか
—一人と鳥の文化動物学—

百瀬淳子（著）258 頁
2011 年 9 月 福村出版
2,400 円＋税
ISBN: 978-4-571-51005-2

この本の表紙には、何とも可愛らしい夏羽のシロエリオオハムの写真が載っている。それを見たとき、すぐ思い出したのは、かつて著者から聞いた話である。

鳥には何の関心もなかった著者の夫が「自分が小学生のころ、日本の湖に明神様のお使いで飛んできて、漁師を助ける水鳥がいるという話を、子供向けの本で読み、子供心に神秘的なものを感じた。大人になって、その鳥が図鑑に載っている愛嬌のない顔をしたアビ、オオハム（冬羽）には、ぜんぜん結びつかなかったよ」という感想をもらしたそうである。

人びとが日常の中でひとつの情景として眺める野鳥を、理系の目、文系の目、そして北極で、温帯でと、見方を変えて見てみると、こんなにも豊かな全貌をあらわしてくるのかという楽しい驚きを感じてくる。それがこの本である。

なお著者は 16 年前の 1995 年に『アビ鳥と人の文化誌—失われた共生』というタイトルで出版していて、今回の本はその続編となっている。

内容を簡単に紹介すると、「第 1 章：アビとともに生きる」で、アビ漁の伝統で知られてきた広島県豊浜町がアビ漁の復活に取り組んできた活動をたどり、「第 2 章：いまアビ鳥を考える」では、それを受けて、そうした活動の担い手となってきた主だった人びとの事績をたどっている。

「第 3 章：アビ類（アビ鳥）とはどんな鳥？」では、アビ類についての基本的な知識を扱い、「第 4 章：アビ鳥と漁師の共生」では、第 1 章で見た地域の人びとの活動の背景にあったアビ漁の歴史を説明している。

「第 5 章：アビ鳥を襲う危機」では、著者は、一挙に話題を広げて、脅かされているのはアビ漁という伝統的漁法だけではなく、アビ類の生存そのものであることを、アビ類が飛来する海域の汚染について語る。

そして、ここから著者は、目を海外に転じて、「第 6 章：伝承に彩られた鳥」、「第 7 章：外国の旅

で出会ったアビたちの肖像」で、北極圏域に広く広がる伝説や、そこに住む人びとのアビ鳥への対応をつづっている。「附章：共生の記録を世界にみる」は、上記で著者が描き出したような人間と野生動物との共生の営みが、アビ類に限ったことではないことを、終章的にまとめている。

この本を読み終えて、その特徴と感ずることは、特定の鳥について、これほどいろいろな分野を網羅して書いてある本はあまりないのではないかという感想である。それは、アビ類の生態や分布といった自然科学的な記述、アビ類の名前の語源やアビ類をめぐる伝承といった人文科学的な記述、またアビ漁にかかわる漁民たちの暮らしといった社会科学的な話題にいたるまでの包括的なアビ類に関する記述が、しかもお互いに関連性を持ちながら記述されているという特色である。学問が細分化される一方、出会った傾向にたいして総合的に対象と取り組むことがますます要請されている現在において、野鳥研究の今後の望ましいあり方ではないかという感想がわいた。

二番目に本書の特徴と思えることは、著者が自国をはじめ諸外国のアビ類の生息地を訪れて、旅行記のような印象の中に、アビの生態や環境や人との交わりが臨場感をもって描き出されていることである。

三番目に感じさせられたことは、そうした諸地域での著者のアビ観察や、アビ類保護の動きの描写を追うことをつうじて、読者の側にそこにおのずと比較観察の契機が生じて、日本人の自然にたいする向き合い方について反省や再評価の心構えが生じてくることであり、そこに本書が社会に対して問いかけている意義もまたあるように思われる。

前著『アビ鳥と人の文化誌—失われた共生—』は高い評価を受けている。室蘭のある図書館の副館長は多くの本を読破し、読後感をひろくネットに載せている名物副館長であるが、この本について「面白くて、尚、頭も一挙に豊になると言う本で、中々あるものではありません」と激賞している。その本の続編というべき本、一読する価値が充分にあるとお勧めする。

中村 豊
(宮崎大学フロンティアセンター)